

3-10. 大井川流域振興連絡会（静岡県大井川流域）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

当連絡会の名称ともなっている「大井川」は、静岡県、長野県、山梨県の3県境からはじまり、静岡県中部を南北に流れ、駿河湾に注いでいる延長168km、流域面積1,280km²一級河川である。上流域には南アルプス国立公園、奥大井県立自然公園等が広がり、豊かな自然環境や深い渓谷美を有する河川景観に恵まれている。本研修に参加したのは、連絡会委員である静岡市、島田市、川根本町の3市町のメンバーで、各地域の概要は以下のとおり。

1. 静岡市（井川地区）

静岡駅から約60km北に離れた、人口577人（平成25年12月末現在）、面積498.9km²の自然豊かな山間地域で、南アルプスの麓として親しまれている。

2. 島田市（川根地区）

島田駅から約17km北部に位置し、人口5,397人（平成25年12月末現在）、面積120.48km²、中央を大井川が蛇行し、その支流の中小河川がこれに注ぎ、道路や人家等が河川に沿って開けており、大小40の集落が点在している。

3. 川根本町

大井川に沿った東西約23km、南北約40kmの南北に細長い形で、人口7,865人（平成26年1月1日現在）面積は496.72km²で、このうちの約90%を森林が占めている。



●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

「大井川流域振興連絡会」は、静岡県中部地域を流れる大井川流域における連携・協力体制の強化を図り、諸施策の推進を目的に、流域の市町等（静岡市、島田市、吉田町、川根本町、大井川鐵道(株)）で組織された団体である。当連絡会では、流域活性化施策の1つとしてエコツーリズム推進活動支援事業を実施し、地域活性化に寄与する地域団体への支援活動を行っている。

現在、大井川流域では、「南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会（静岡市井川地区）」、「地域資源を生かしたツーリズム推進会議（島田市）」、「川根本町エコツーリズムネットワーク（川根本町）」の3団体が活動しており、交流人口の拡大等により地域活性化に貢献している。各団体は、中山間地域が主な活動地域である点は共通しているが、各地域の伝統、文化及び地理的条件やそれらを活用した体験メニュー、組織形態等の点において、相違点が

あるほか、各活動地域が遠隔地であることから、団体同士の連携も十分に図られていないのが現状である。

また、いずれの団体も過疎化、高齢化が進んでいる中山間地域で活動していることから、人材の確保や財源不足等、活動を実施していくにあたり団体間で組織運営上の課題を抱えている。

こうした経緯から、アドバイザー派遣制度を活用させていただき、①各団体が共通して抱える諸問題解決に向けた糸口を見つけること、②大井川流域の各団体が参加することにより、団体同士の交流を促進し、流域全体における広域連携を考える機会とすること。これら2つ目的を達成したいと考えた。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日 時	平成26年1月18日(土)～平成26年1月19日(日)
場 所	静岡県島田市川根町(島田市山村都市交流センターささま)、静岡県川根本町地名
アドバイザー	NPO法人信越トレイルクラブ 事務局長、一般社団法人信州いいやま観光局 事務局次長 木村 宏 氏
参加者	南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会、静岡市清流の都創造課、地域資源を生かしたツーリズム推進会議(島田市山村都市交流センターささま、川根温泉ふれあいの泉、NPO法人まちづくり川根の会)、島田市政策推進課、川根本町エコツーリズムネットワーク、川根本町商工観光課 計29名
スケジュール・方法	川根本町エコツーリズムネットワークが提供している体験プログラム等の現地視察を行いながら、今後の地域資源の活用のあり方や、人材育成等の組織運営手法について助言をいただく。また、信越トレイルの事例紹介や地元関係者との意見交換等を実施し、大井川流域におけるエコツーリズムを通じた広域連携の推進についても助言をいただく。 【1日目】 ・説明会(島田市山村都市交流センターささま) ・川根本町エコツーリズムネットワーク体験プログラム等視察 ・講演・意見交換会(島田市山村都市交流センターささま) 【2日目】 ・講演・意見交換会 ・大井川流域視察

(3) アドバイスの内容

●1日目

①川根本町エコツーリズムネットワーク体験プログラム等視察

川根本町地名における「山の田んぼの米作り体験」メニュー及び「サンゴーカントリーともしび」における活動状況の紹介

②講演・意見交換会：テーマ「エコツーリズムのベースづくりについて」

なべくら高原「森の家」設立までの経緯や、ニューツーリズム体験メニュー提供開始までの過程の紹介を皮切りに、メニュー開発に係る注意点(この体験メニューで何を訴えたいか等)や地域資源の保全活動及び景観作りの大切さを説明。その他、関係者にニューツーリズム活動を広めていく方法や、保全活動自体が体験メニュー化した事例を紹介。飯山市において現在計画中の森林セラピーも紹介していただいた。

参加者からは、保全活動や再生事業のメニュー化や、景観条例の有無等の質問があった。

●2日目

①講演・意見交換会：テーマ「エコツーリズムをベースにした広域観光の展開」

信越トレイルという里山を巡る全長 80km のロングトレイルの成立や事業概要について紹介していただいた。信越トレイル成立までには、米アパラチアントレイル視察（米国における官民協働のあり方や、ボランティアの役割及び明確な管理規格の制定を学習）を実施したことや、関田トレイル協定の締結後のルート整備におけるボランティアの活躍があったことを紹介。市や県の垣根を越えた連携を組立てるためには、各主体の役割の明確化が重要である。また、継続的に実施しているルートの保全活動の重要性や、信越トレイルの理念等の形成における加藤則芳氏の役割を説明された。

最後に、信越トレイルクラブの情報発信について紹介され、講演は終了した。

参加者からは、トレイルコースの管理手法（トイレ等）や、参加者の体力レベルの把握及び募集における注意事項等について質問があった。



田んぼ



ともしび



研修



トンネル

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

今回の研修は、大井川流域で活動している 3 団体が抱える運営上の諸課題に係る解決策を模索することに加え、団体同士の交流促進を通じた各地域活動の活性化を図ること、そして大井川を 1 つの軸として各団体が連携し、広域的エコツーリズムの推進を考えるきっかけ作りとすることを目的に取組んだ。

団体が抱える諸問題については、木村先生から、信越トレイルや信州いいやま観光局における組織運営手法を御

紹介いただいたことにより、今後の体験メニューづくりや情報発信の方法について学ぶとともに、エコツーリズム等の活動においては、ガイドだけが頑張っても成立するものではなく、地域の人達の意識を醸成することが不可欠であることを認識した。

また、広域連携については、講演を通じた意見交換や各団体による各々の取組み内容の紹介を実施することにより、各団体メンバー同士の交流を深めることができた。木村先生からも、大井川流域における団体間交流や連携について、「大井川を軸とすることもできれば、大井川鐵道を軸とすることもできる。」との御意見をいただいたことから、地域の枠を越えた連携が十分実現可能であると共通認識を持つことができた。

●今後の期待される効果

各団体の運営においては、今回の研修で学習したメニュー開発や情報発信の手法、各活動地域で意識作り等を踏まえた活動の推進が期待される。また、広域連携の点では、各団体メンバーの交流が促進されたこと、木村先生の講演を通じて大井川流域における広域連携が十分可能であるとの共通認識を持つことができたこと等から、今後は、具体的な動きとして表れることが期待される。

●今後の取り組み

先進地における取組みを学んだことを、各地域における活動に反映し、運営基盤の強化や体験メニュー等を考案していくことにより、地域活性化を図っていきたい。また、地域関係団体や NPO 法人、行政機関が参加したこの機会を活かし、連絡調整をはじめとした団体間連携をより促進させ、大井川流域を舞台としたエコツーリズムにおける広域連携の促進や、地域振興を考えていきたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・エコツーリズム活動の推進は、ガイドをはじめとした活動団体の構成員の働きのみで成立するものではなく、母体となる地域全体の理解や協力が不可欠であるということ。地域が「こういう町（村）にしていきたい」というビジョンを共有化し、独自のカラーを打ち出していくことと、顧客が求める地域像とのマッチングを意識していくことが、魅力ある地域を作っていく上で大切。
- ・体験メニューの開発にあたっては、労力と対価のバランスを考えるとともに、自分達が何を訴えたいか、リピートしてもらうにはどうすればよいかという視点を盛り込むと良い。
- ・地域資源の活用において、荒廃した田畑や建築物の再生という手法もある。（ただし、そこには、参加者が「加勢したい」と思うインセンティブが必要。）

●その他感想

今回の研修を通じて、一番印象強かった話が、大きく 2 つある。

1 つめは、廃寺や里山の再生事業で、当事例は、体験メニュー自体が非常にユニークで、メディアに取り上げられたことにより、市外の人々の注目を集め、地域の問題が認知され、解決に至ったという点で画期的だと思った。地元調整の難しさや、地域に存在する問題と解決策の両方を明確化し、人々が「参加したい」と感じる仕立てにする過程が肝要ではあるが、地域が抱える問題の新しい解決方法として、エコツーリズムが活用できる可能性が見えた。また、こうした活動の中で、地域住民がエコツーリズムへ参加するきっかけ作りとなった点も大きい。地元とその他の地域の交流を促進していく土壌を形成するためにも、魅力的である。

2つめが広域連携の考え方で、信越トレイルにおいては、各主体の管理区域が明確化され、観光協会や自治体等で調整が図られているとともに、自然観察調査の実施やボランティアによる活動等、継続的に管理するスキームが確立されているのが素晴らしいと思った。加えて、情報を一元化することにより、顧客が現ポイントから次ポイントへ進む（地域に遊びに来てくれる）誘いを組立てている点も、広域連携をより有機的、実用的なものにしていると感じた。大井川における広域連携にあたっては、こうした管理手法や情報発信の考え方を取り入れてみたいと思う。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

NPO 法人信越トレイルクラブ 事務局長、

一般社団法人信州いいやま観光局 事務局次長 木村 宏 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

大井川流域の 4 市町と大井川鐵道(株)によるエコツーリズムの推進状況は、特に上流域のエリアにおいては自然資源を生かしたアクティビティーの提供やガイドによるツアーなどが実施され、河口域の吉田、島田のエリアでは、大井川活用の歴史や文化遺産などの資源を生かした観光客の受入をおこなっています。これらを結ぶ重要な役割を果たしているのが大井川鐵道であり、またその成り立ちをさかのぼれば、電源開発の歴史をひもとくことができます。大井川鐵道が果たす役割は大きく、大井川流域を旅するものにとっての魅力のひとつになっています。その要因は蒸気機関車の動体保存であり、急勾配を上るアプト式鐵道の運行です。また旧型車両の電車の運行もマニアのあこがれでもあります。モータリゼーションがすすむなかではあるものの、その経営努力の成果としては全国的な知名度を誇り支えられているところでもあります。これらの資源を生かし、また温泉施設も流域に点在することもあり、温泉宿泊を伴う旅行客の入り込みが多いエリアではありますが、エコツーリズムの視点からすると、これからその仕組みを作っていく地域ではないでしょうか。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

南アルプスに源を発する大井川の川上から川下までの区間が連携して事業を推進することは、人々の生活と重要に関わってきた自然との共生や、農業用水の確保による農業政策の歴史、地域の産業の発展など、上下流のつながりを伝えるのに大事な意味があるのではないのでしょうか。また、お茶やミカンをはじめとした柑橘類の生産地でもあり、日本人にはなじみ深い 2 つの生産物を持っていることは強みでしょう。大井川を基軸とした生態系や人々の暮らし・文化を伝えてこそエコツーリズムの成立要件となるのではないかと感じました。また地形的にも山と川と海のつながりを伝えられる点においても、誇るべき自然(観光)資源ではないのでしょうか。

●アドバイス(講義等)の概要

地域が連携して事業を推進する体制として、信越トレイルの事業推進を例にお話しさせていただきました。周辺 10 市町村の接する里山のトレッキングルートを整備してきた経緯や手法、関係機関・団体の調整、新たな資源の発掘などの例を挙げ、地域をあげて取り組む意識の醸成や、役割分担など、トレッキングルート整備の発想から 8 年の時間を要したこと、この歳月は、ルート整備のみならず、地域内のいろいろな調整の日々を重ねた結果であったことを伝え、地域の連携、広域の連携にはじっくり腰を落ち着けて取り組む姿勢と、共通する[理念]が必要であったことを話しました。

さらに、過疎高齢化が進む地域にあって、観光関係者のみならず、地域住民やボランティアの力による整備が必要であったこと、整備後の運営については NPO がこの任に当たり、システムの運用のための組織作りの必要性もお伝えしました。

アクティビティー(体験メニュー)の提供、旅行商品の造成、情報提供、さらに広域商品の作成などについては、信越トレイルクラブの事務所があり、(一社)信州いいやま観光局が運営する[なべくら高原・森の家]の地域資源活用型の商品ラインナップやその展開、また観光局が手がける着地型商品の展開も交えお話ししました。

大井川流域には多様な資源が点在し、個々の活動にはすでに観光客などの受入実績もあります。新たな事業を構築するというよりは、いかに地域の情報を共有し、発信していくか。また[エコ]に対する共通認識の醸成も必要と感

じました。個々の取り組みを個々に終わらせるのではなく、お客様が地域内のいろいろなサービスを楽しみ、滞在していただく仕組み作りこそ経済効果の拡大という意味でも必要ではないでしょうか。

●全体構想への取組状況・意向について

現在、上流部の静岡市井川地区から下流の吉田町までの情報の一元化ができていません。パンフレットですらこの一帯を網羅するものではありません。

情報収集、集約、共有そして発信と、今すぐ取り組めることから始めて見てはいかがでしょうか。エリア内では、民間の皆様が個々の活動をしている現状を踏まえれば、自治体の担当者が集まってこれらの情報を集め、集約。その後、官民の関係者が集まってお互いにどんな取り組みをしているかの情報共有。この情報共有の場を各地で何度もおこなうことが大切だと思います。お互いに顔を合わせコミュニケーションをとりながら、ペーパーだけでなく、実際の目や口で伝え、体験してみることが大切だと思います。そしてエコツーリズムに取り組む姿勢を共に考え定めることも大切です。

現状を踏まえ、新たな観光地づくりを念頭に[エコツーリズム]全体構想の作成に取り組むいい契機にも感じます。共に理念を共有し、自然資源の見直しや継続的な利用と保全、滞在型の観光地づくりなど構想案を作成しながら関係者が話し合う機会をつなげていただければ、今回の会合の成果にもなってくるのではないのでしょうか。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回、上流から下流までの官民両者の観光関係者が一堂に会しました。大井川流域では初めてのことと聞きました。

2日間の研修にご一緒させていただいて、それぞれの皆様が個々の取り組みを生き生きとなされている印象を受けました。このエネルギーが結集し、連携していくことこそ行政境を超えた新たな大井川流域のツーリズムエリアができてくるのではないのでしょうか。景観をきれいにしていくことでのイメージアップも提案させていただきました。都市に近い割には人工的な景観破壊も見られず、新たに意識を高く景観作りをしていくことが十分可能なエリアと感じました。

これを機に「エコツーリズム推進」の名の下に闊達な議論が始まり、従来型の観光地から新たにエコツーリズム手法による観光地への発展につながっていかれることを期待いたします。